

## 看護学生の自我同一性と個人の内的属性との関係

浅井麻希子<sup>1)</sup>, 横田恵子<sup>2)</sup>, 高間静子<sup>2)</sup>

1) 富山医科薬科大学医学部看護学科学生

2) 富山医科薬科大学医学部看護学科

### 要 旨

本研究は看護学生の自我同一性と個人の内的属性との関係について調べた。内的属性を、対人不安、自己没入、共感的配慮、抑うつ性、コンピテンス、セルフモニタリング、社会的スキル、自己効力感などとした。対象はT大学看護学科の1年生から4年生までの196名である。測定用具には自我同一性、対人不安、自己没入、共感的配慮、抑うつ性、コンピテンス、セルフモニタリング、社会的スキル、自己効力感等の既存の尺度を使用した。自我同一性を従属変数とし、これらの内的属性を独立変数として関係を調べた。更に、調査対象の属性である学年、性別、年齢、兄弟姉妹数、親友数、友人数、対人交流における相手に意見を求める程度等の違いによる結果も調べた。その結果、看護学生の自我同一性と対人不安、共感的配慮、抑うつ性、コンピテンス、セルフモニタリング、自己効力感などとの間に相関がみられた。しかし自己没入、社会的スキルなどとの間には相関はみられなかった。

### キーワード

看護学生, 対人不安, 抑うつ性

### 序 論

Erikson は、「同一性 (identity) の概念を中心に、統合的な人格形成を人生周期という視点からとらえ、ある段階の発達課題を達成しなければ、次の新しい発達課題をもつ段階へと進むことができない」<sup>1,2)</sup>と述べている。Evans は、「それは人間が漸成的な各段階で出会う社会的環境とのかかわりあいの過程の中で、各段階特有の課題を解決していく方法に影響を与えることで、社会の一員となるという意味である」<sup>1,3)</sup>と述べている。Erikson のライフサイクルの8段階の図式のなかで、(自我同一性) から (同一性拡散) は第5段階にあり、思春期の心理社会的課題として定義している<sup>4)</sup>。この時期は、「自分自身の同一性 (自我同一性) 感を感じ始める時期」<sup>1)</sup>であり、「自我同一性の感覚とは、内的不変性と連続性とに合致

する経験から生まれた自信のことである」<sup>1,5)</sup>としている。さらに、「アイデンティティとは、(否定的なものをも含む) すべて以前の同一化、つまり自分にとって重要な影響力を有する人との一体感または同一視や自己像の統合を意味する」<sup>6)</sup>と述べている。

Schlenker らは、対人不安を「現実の、あるいは想像された対人的場面において個人的に評価されたり、評価されることが予測されることから生じる不安」<sup>7,8)</sup>と定義している。また、若山は「他人と触れ合う機会が多い人は、対人関係の問題にぶつかりやすくなる。そういう人にとって、自分の性格を知っておくということは大切なことである。自己を知るということは、自分の限界を知り、また隠された可能性を知ることにもつながる。自分自身をよりよく知るということは、いうならば自分自身に対する見方の枠組が広がること

である」<sup>9)</sup>とも述べている。さらに、宮下は「自分とは何者か、自分のめざす道は何か、自分の人生の目的は何か、自分の存在意義は何かなど、自己を社会の中に位置づける問いかけに対して、肯定的かつ確信的に回答できることがアイデンティティの確立を示す」<sup>10)</sup>と述べている。無藤は、「ひとりの人間としての自分の基盤となる感覚があるときに、他者についても、それらをもった存在であるという感覚が大前提として生じ、自分と他人の関係が生じる」<sup>11)</sup>と報告している。このことから、自己を知ることができる者は、他者をも知ることができ、他者に対する不安が減るものと考えられる。つまり、対人不安は、自我同一性と関係があるものと考えられる。

自己没入とは、「自分について考えやすく、自分について考えたらなかなかそれが止まらないという特性である」<sup>12)</sup>とされている。若山は、「相手の話に聞き入るということは、やはり同時に相手の言葉に心を動かされている自分の心、その中に生じつつある変化や動きを注意深く見つめるという努力が必要である」<sup>13)</sup>と述べている。自己に注意を向ける、自分について考えるということは自分を知るということにつながる。また、丸は「自分自身は何者かと考える際に、今まで生きてきた自分の歴史は、いまの自分、これからの自分のなかに組み込まれ、統合されていくことになる。そうすることで、自己の一貫性や連続性が維持され、堅固な自己意識、つまり、アイデンティティが一步一步たしかなものとなってくる」<sup>14)</sup>と述べている。このことから、自己没入は、自我同一性と関係があるものと考えられる。

Wispe は、共感とは「自分を意識している自我による、別の自我の肯定的あるいは否定的な経験が無批判的にとらえる試み」<sup>15, 16)</sup>と述べている。長谷川らは「健康で安定した自己確立を目指している人は、他者の苦悩に共感することでさらに成長するが、同一化の心理を抜け切らない未熟な人は、他者の苦悩に巻き込まれることによって、自他共に心の傷を大きくしてしまう危険がある」<sup>17)</sup>と述べている。また、長谷川らは「自己への気づきは、相手に対する誠実さにもつながっていく。自分自身を本当に正直に認めるということは、他

者に対しても正直に対応できることの証しだからである。このような対人関係の体験を重ねる結果として、自分自身の価値基準も柔軟になっていくであろうし、共感的な関係も発展していく」<sup>17)</sup>と報告していること等から、共感的配慮は自我同一性と関係があることが予測できる。

外口らは、「抑うつ感情（気分）とは、気がめいり、さびしくなり、悲しくなり、希望を失い、絶望的な気持ちになることである」<sup>18)</sup>と述べている。Pyszczynski と Greenberg の抑うつ的自己注目スタイル理論によると、「抑うつ発生・維持は抑うつ的な自己注目のしかたによって説明される。すなわち、アイデンティティや自尊心のもとなる対象を失うと、非常に強いネガティブな感情を経験し、ふだん通りの行動がとれなくなる。そして、喪失した対象をとりもどすことに焦点を当てた自己調整が行われる。しかし、喪失対象を取り戻すことができず、自己調整サイクルを抜けることができないときに、喪失に関して過度の自己注目がおこる。その結果、ネガティブな感情の増大、自己への原因の帰属、自責、自尊心の低下や遂行の低下などの抑うつ症状が生じる」<sup>12, 19)</sup>。また、Marylly Ellen Doona は、「取り入れという心理的行動は、周囲の世界との相互作用の中で、自己のアイデンティティ（同一性）を形成してゆく主たる方法であるが、抑うつ的な人は、悪い対象を取り入れ、そのために自分自身を悪いものとみることになる」<sup>20)</sup>と述べている。このことから、抑うつ性は自我同一性と関係があるものと考えられる。

Takai & Oka は「コンピテンスは年齢が上がるに連れて発達していく」<sup>21, 22)</sup>ことを指摘している。White は、「コンピテンスとは、環境との交流の積み重ねの結果生じるもの、つまり効果的に環境と相互作用する能力」<sup>21, 23)</sup>と定義している。栗本は、この定義に対して「年長者の方がコンピテンスが身につくような経験を積み重ねているからであろう」<sup>21)</sup>と述べている。山下は、「アイデンティティは徐々にかたちづくられるもので、それが絶えずつくり変えられながら、年齢を経ていく」<sup>24)</sup>と述べている。以上のことから、コンピテンスは自我同一性と関係があるものと考えられる。

Snyder は「セルフモニタリングとは、状況

や他者の行動に基づいて、自己の表出行動 (expressive behavior) や自己呈示 (self-presentation) が、社会的に適切なのかを観察し (self-observation)、自己の行動を統制すること (self-control) である」<sup>25, 26)</sup> と定義している。Snyder は、「高い SM (self-monitoring) の個人は、状況のおよび対人的に適切と考えられる社会的行動を敏感にかつ実際的に行うことについて比較的柔軟で適合的であると自分自身でみなしている」<sup>25, 27)</sup> と述べている。Marylly Ellen Doona は、「あるがままの現実を直視する能力には、独自の人間としてのアイデンティティ感覚一つまり、自分自身の行動に対して主体的であること一が必要である」<sup>28)</sup> と述べており、このことからセルフモニタリングは自我同一性と関係があるものと考えられる。

無藤は、「アイデンティティをとりあげるとき、その人自身が過去からずっと連続して生きてきている存在としての自分を感じるという側面と、社会のなかでみられたり要請されたりしている自分が自分を社会のなかでどう位置づけるかという側面の、両面が考えられる」<sup>11)</sup> と述べている。相川によれば、社会的スキルとは「具体的な対人場面において、対人的な目標を効果的かつ適切に達成できるような一連の行動と、そのような行動を可能にする認知能力のこと」<sup>29, 30)</sup> である。無藤は、「他者に向かって表現しようという構えのなかで自分を感じるとき、そしてそこで感じとられたものを表現するとき、自分というものがかたちをとって現れてくるようである」<sup>11)</sup> と述べている。このことから、社会的スキルは自我同一性と関係があるものと考えられる。

次に自己効力感についてみると、松田は、「自分が行為の主体であると確信していること、自分の行為について自分がきちんと統制しているという信念、自分が外部からの要請にきちんと対応しているという確信が自己効力感である」<sup>31)</sup> と述べている。下村は、「自己効力は、ある行動が自分にうまくできるかという予期の認知されたものであり、行動と直接的な関連をもつ。また、自己効力はどれくらい努力するか、困難に直面した際にどれくらい耐えられるかを決定し、強い自己効力をもつ人は自分の能力をうまく活かし、さらに努

力する」<sup>32)</sup> と述べている。Bandura は、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信を “self-efficacy” と呼んでいる」<sup>33, 34)</sup>。また、self-efficacy は、個人が自ら作り出してゆくものであると考えている<sup>33, 35)</sup>。若山は、「自分を知るということは、自分の限界を知り、また自分の隠された可能性を知るということにもつながる」<sup>9)</sup> と述べている。このことから、自己効力感とは自我同一性と関係があるものと考えられる。

以上のことから、次のような仮説を推定した。

- 1) 対人不安は自我同一性と関係がある。
- 2) 自己没入は自我同一性と関係がある。
- 3) 共感的配慮は自我同一性と関係がある。
- 4) 抑うつ性は自我同一性と関係がある。
- 5) コンピテンスは自我同一性と関係がある。
- 6) セルフモニタリングは自我同一性と関係がある。
- 7) 社会的スキルは自我同一性と関係がある。
- 8) 自己効力感とは自我同一性と関係がある。

本研究では、これらの関係を明らかにすることを目的とした。

## 研究方法

1. **調査対象**：T大学の看護学生259名を対象とした。
2. **調査内容**：看護学生の自我同一性とそれに影響すると考えられる対人不安、自己没入、共感的配慮、抑うつ性、コンピテンス、セルフモニタリング、社会的スキル、自己効力感等の内的属性を調べると同時に、性別、年齢などの人口学的背景も調査した。
3. **調査方法**：調査表を配布し、回収は留置法により、回収箱に投函する方法をとった。
4. **測定用具**：測定尺度は、多次元自我同一性尺度<sup>36-39)</sup>、対人不安意識尺度<sup>40)</sup>、自己没入尺度<sup>12)</sup>、対人的反応性指標の共感的配慮尺度<sup>41)</sup>、自己評価式抑うつ性尺度<sup>42)</sup>、青年のコンピテンス評価尺度<sup>21)</sup>、自己モニタリング尺度<sup>25)</sup>、社会的スキル尺度<sup>43)</sup>、対人行動における自己効力感尺度<sup>44)</sup>等を用いた。いずれの尺度も信頼性、妥当性が確認されたものである。

- 5. データの統計処理：データ解析に伴う偏相関係数、標準偏回帰係数、 $\alpha$ 係数の算出にはSPSS統計ソフトを用いた。
- 6. 倫理的配慮：調査用紙は誰のものか特定できないように無記名とし、この結果は目的以外には使用しないことを事前に説明した上で、この調査の主旨に承諾が得られた者のみにアンケート調査を行った。
- 7. 調査期間：2002年7月1日～2002年7月19日

### 結 果

- 1. 調査対象：T大学の看護学生259名を対象とした結果、回答が得られたのは196名（回収率75.7%、有効回答率100%）であった。表1には調査対象の内訳を示した。
- 2. 内的属性の測定に使用した尺度の信頼性係数（Chonbachの $\alpha$ 係数）は表2に示した。
- 3. 自我同一性と内的属性との関係
  - 1) 表3には対象者196名の自我同一性と内的属性との関係を示した。看護学生の自我同一性と対人不安や抑うつ性との間に有意な負の相関がみられた。しかし、自己没入、共感的配慮、コンピテンス、セルフモニタリング、社会的スキル、自己効力感などとは有意な相関はみられなかった。次に、自我同一性に最

も影響する個人の内的属性を標準回帰係数で見ると、抑うつ性であり、続いて対人不安であった。

表1 対象の背景 n=196

属性	群	数	%
学 年	1 年 生	53	27.0
	2 年 生	47	24.0
	3 年 生	48	24.5
	4 年 生	48	24.5
性 別	男 性	8	4.1
	女 性	188	95.9
年 齢	18～20歳	120	61.2
	21～25歳	72	36.7
	26歳以上	4	2.0
兄弟姉妹数	0 人	12	6.1
	1 人	99	50.5
	2 人	61	31.1
	3人以上	24	12.3
親 友 数	0 人	3	1.5
	1 人	13	6.6
	2 人	35	17.9
	3 人	51	26.0
	4人以上	94	48.0
友 人 数	0 人	1	0.5
	1 人	1	0.5
	2 人	0	0.0
	3 人	1	0.5
	4人以上	193	98.5
対人交流と意見の要求	求めない	11	5.6
	ときどき	101	51.5
	比較的多く	84	42.9

表2 内的属性の尺度別信頼性

n=196

尺 度	信頼係数	尺 度	信頼係数
自我同一性尺度 全体	0.912	共感的配慮尺度 全体	0.771
自己斉一性・連続性	0.860	想像性尺度 (FS)	0.819
対目的同一性	0.844	視点取得尺度 (PT)	0.680
対他的同一性	0.809	共感的配慮尺度 (EC)	0.630
心理・社会的同一性	0.823	個人的苦痛尺度 (PD)	0.567
対人不安尺度 全体	0.965	抑うつ性尺度 全体	0.810
I. 対人関係で緊張する悩み	0.813	コンピテンス尺度 全体	0.843
II. 自分や他人が気になる悩み	0.635	社会的知識	0.638
III. 集団に溶けこめない悩み	0.917	共感	0.865
IV. 多勢の人に圧倒される悩み	0.855	場のコントロール	0.791
V. 自分に満足できない悩み	0.841	セルフモニタリング尺度 全体	0.619
VI. 気分が動揺する悩み	0.821	演技性尺度	0.589
VII. くつろいで人とつき合えない悩み	0.731	他者志向性尺度	0.584
VIII. ささいなことを気に病む悩み	0.853	外向性尺度	0.369
IX. 生きている充実感がない悩み	0.857	社会的スキル尺度 全体	0.799
X. 気分のすぐれない悩み	0.737	関係維持	0.848
XI. 目が気になる悩み	0.852	関係開始	0.624
XII. 変な人に思われる悩み	0.628	自己主張	0.704
自己没入尺度 全体	0.878	自己効力感尺度 全体	0.850

信頼性係数は、Chonbachの $\alpha$ 係数で示した。

表3 自我同一性と内的属性との関係

n=196

属 性	PC	SP
対 人 不 安	-0.263**	-0.304**
自 己 没 入	-0.105	-0.092
共 感 的 配 慮	-0.122	-0.100
抑 う つ 性	-0.365***	-0.365***
コ ン ピ テ ン ス	0.045	0.043
セ ル フ モ ニ タ リ ン グ	-0.010	-0.007
社 会 的 ス キ ル	0.026	0.023
自 己 効 力 感	0.076	0.072

\*\*\*P<0.001,\*\*P<0.01

PC：偏相関係数 (Partial Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partial regression)

表5 性別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係

n=196

属 性	女 性	
	PC	SP
対 人 不 安	-0.271***	-0.318***
自 己 没 入	-0.091	-0.081
共 感 的 配 慮	-0.110	-0.091
抑 う つ 性	-0.351***	-0.355***
コ ン ピ テ ン ス	0.026	0.025
セ ル フ モ ニ タ リ ン グ	0.017	0.013
社 会 的 ス キ ル	0.020	0.018
自 己 効 力 感	0.078	0.073

\*\*\*P<0.001

PC：偏相関係数 (Partial Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partial regression)

男性群は8名と少数であったため結果を出せなかった。

表4 学年別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係

n=196

属 性	1 年 生		2 年 生		3 年 生		4 年 生	
	PC	SP	PC	SP	PC	SP	PC	SP
対 人 不 安	-0.310*	-0.330*	-0.370*	-0.492*	0.082	0.090	-0.500**	-0.581**
自 己 没 入	-0.108	-0.092	-0.025	-0.023	-0.185	-0.158	0.046	0.033
共 感 的 配 慮	-0.009	-0.007	-0.159	-0.144	-0.338*	-0.299*	-0.361*	-0.276*
抑 う つ 性	-0.281	-0.306	-0.383*	-0.377*	-0.453**	-0.458**	-0.171	-0.125
コ ン ピ テ ン ス	0.030	0.029	-0.199	-0.215	0.268	0.234	0.088	0.075
セ ル フ モ ニ タ リ ン グ	0.324*	0.270*	-0.043	-0.032	-0.072	-0.053	-0.464**	-0.322**
社 会 的 ス キ ル	-0.036	-0.034	0.146	0.138	0.207	0.158	0.129	0.111
自 己 効 力 感	-0.018	-0.015	-0.092	-0.097	0.199	0.147	0.045	0.043

\*\*P<0.01,\*P<0.05

PC：偏相関係数 (Partial Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partial regression)

2) 表4には学年別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係について示した。

学年を1年生, 2年生, 3年生, 4年生の4群に分けて, 自我同一性と対人不安との関係を見ると, 1年生群, 2年生群, 4年生群では負の相関がみられた。しかし, 3年生群では有意な相関はなかった。次に, 共感的配慮との関係を見ると, 1年生群, 2年生群では有意な相関はみられなかったが, 3年生群, 4年生群では負の相関がみられた。また, 抑うつ性との関係を見ると, 2年生群のみ負の相関がみられた。セルフモニタリングとの関係を見ると, 1年生群では正の相関, 4年生群では負の相関がみられた。

次に, 自我同一性に最も影響している属性は, 1年生群ではセルフモニタリングが, 2年生群, 3年生群では抑うつ性が, 4年生群

では対人不安であった。

3) 表5には性別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係について示した。

自我同一性と対人不安や抑うつ性などとの関係を見ると, 女性群において負の相関があった。次に, 自我同一性に最も影響している属性は抑うつ性, 対人不安の順であった。

4) 表6には年齢別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係について示した。

年齢区分を18~20歳, 21~25歳, 26歳以上の3群に分けて, 自我同一性と対人不安との関係を見ると, 18~20歳群, 21~25歳群では負の相関があり, 抑うつ性との関係を見ると, 18~20歳群, 21~25歳群では負の相関がみられた。セルフモニタリングとの関係を見ると, 21~25歳群では負の相関がみられた。しかし, 18~20歳群では有意な相関はみられなかった。

表6 年齢別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係 n=196

属 性	18~20歳		21~25歳	
	PC	SP	PC	SP
対 人 不 安	-0.216*	-0.249*	-0.390**	-0.426**
自 己 没 入	-0.151	-0.137	0.031	0.025
共 感 的 配 慮	-0.102	-0.082	-0.233	-0.211
抑 う つ 性	-0.369***	-0.387***	-0.305*	-0.258*
コ ン ピ テ ン ス	0.008	0.008	0.161	0.142
セルフモニタリング	0.104	0.082	-0.301*	-0.218*
社 会 的 ス キ ル	0.071	0.062	0.087	0.077
自 己 効 力 感	0.034	0.031	0.039	0.036

\*\*\*P<0.001,\*\*P<0.01,\*P<0.05

PC：偏相関係数 (Partical Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partical regression)

26歳以上群については4名と少数であったため結果を出せなかった。

表7 兄弟姉妹数別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係

n=196

属 性	0人		1人		2人		3人以上	
	PC	SP	PC	SP	PC	SP	PC	SP
対 人 不 安	-0.301	-0.217	-0.282*	-0.326*	-0.265	-0.308	-0.584*	-0.663*
自 己 没 入	0.120	0.095	-0.096	-0.088	-0.279	-0.211	0.310	0.235
共 感 的 配 慮	-0.464	-0.380	-0.188	-0.144	0.011	0.009	-0.316	-0.305
抑 う つ 性	-0.282	-0.183	-0.408***	-0.438***	-0.370*	-0.329*	-0.122	-0.102
コ ン ピ テ ン ス	0.288	0.317	-0.101	-0.085	0.190	0.179	0.079	0.100
セルフモニタリング	-0.019	-0.017	-0.162	-0.123	0.208	0.138	0.164	0.117
社 会 的 ス キ ル	0.072	0.099	-0.044	-0.038	-0.018	-0.015	0.161	0.176
自 己 効 力 感	0.578	0.533	0.099	0.091	-0.025	-0.021	-0.114	-0.118

\*\*\*P<0.01,\*P<0.05

PC：偏相関係数 (Partical Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partical regression)

次に、自我同一性に最も影響している属性は、18~20歳群では抑うつ性が、21~25歳群では対人不安であった。

5) 表7に兄弟姉妹数別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係を示した。

兄弟姉妹数を0人、1人、2人、3人以上の4群に分けて、自我同一性と対人不安との関係を見ると、1人群、3人以上群では負の相関がみられた。しかし、0人群、2人群では有意な相関はなかった。次に、抑うつ性との関係を見ると、1人群、2人群では負の相関がみられたが、0人、3人以上の群では、有意な相関はみられなかった。

次に、自我同一性に最も影響している属性は、1人群、2人群では抑うつ性が、3人以上の群では対人不安であった。

6) 表8には親友数別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係について示した。

親友数を0人、1人、2人、3人、4人以上の5群に分けて、自我同一性と対人不安との関係を見ると、2人群では負の相関がみられた。しかし、1人群、3人群、4人以上の群では有意な相関はみられなかった。次に、共感的配慮との関係を見ると、3人群では負の相関があった。しかし、1人群、2人群、4人以上の群では有意な相関はなかった。抑うつ性との関係を見ると、4人以上の群では負の相関がみられたが、1人群、2人群、3人群では有意な相関はみられなかった。自己効力感との関係を見ると、2人群では負の相関がみられた。しかし、1人群、3人群、4人以上の群では有意な相関はみられなかった。

次に、自我同一性に最も影響している属性は、2人群では対人不安が、3人群では共感的配慮が、4人以上の群では抑うつ性であった。

7) 表9に友人数別にみた自我同一性と個人の

表8 親友数別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係

属 性	1人		2人		3人		4人以上	
	PC	SP	PC	SP	PC	SP	PC	SP
対 人 不 安	-0.449	-0.355	-0.613**	-0.843**	-0.269	-0.331	-0.206	-0.214
自 己 没 入	-0.082	-0.043	-0.090	-0.065	-0.089	-0.074	-0.212	-0.196
共 感 的 配 慮	-0.057	-0.016	0.338	0.322	-0.461**	-0.440**	-0.032	-0.029
抑 う つ 性	-0.159	-0.075	-0.086	-0.081	-0.191	-0.185	-0.422***	-0.424***
コ ン ピ テ ン ス	0.656	0.577	0.127	0.139	0.165	0.135	-0.070	-0.068
セ ル フ モ ニ タ リ ン グ	-0.393	-0.171	0.370	0.239	-0.300	-0.228	-0.046	-0.039
社 会 的 ス キ ル	0.464	0.176	0.017	0.011	-0.173	-0.171	0.054	0.048
自 己 効 力 感	-0.317	-0.202	-0.520*	-0.501*	0.031	0.025	0.190	0.183

\*\*\*P<0.001,\*\*P<0.01,\*P<0.05

PC：偏相関係数 (Partial Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partical regression)

0人群は3名と少数であったため結果を出せなかった。

表9 友人数別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係

属 性	4人以上	
	PC	SP
対 人 不 安	-0.269***	-0.311***
自 己 没 入	-0.101	-0.089
共 感 的 配 慮	-0.111	-0.090
抑 う つ 性	-0.343***	-0.339***
コ ン ピ テ ン ス	0.065	0.062
セ ル フ モ ニ タ リ ン グ	-0.089	-0.068
社 会 的 ス キ ル	0.038	0.033
自 己 効 力 感	0.078	0.071

\*\*\*P<0.001

PC：偏相関係数 (Partial Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partical regression)

0人群は1名、1人群は1名、2人群は0人、

3人群は1人と少数であり結果が出せなかった。

内的属性との関係を示した。

数を0人、1人、2人、3人、4人以上の5群に分けて、自我同一性と対人不安や抑うつ性などとの関係を見ると4人以上群におい

て負の相関を示した。

次に、自我同一性に最も影響している属性は、抑うつ性、対人不安の順であった。

8) 表10に対人交流における相手に意見を求める程度別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係を示した。

対人交流における相手に意見を求める程度を「あまり求めない」、「ときどき求める」、「比較的多く求める」の3群に分けて、自我同一性と対人不安との関係を見ると、比較的多く求める群では負の相関がみられたが、特に求めない群、ときどき求める群では有意な相関がみられなかった。次に、抑うつ性との関係を見ると、ときどき求める群、比較的求める群では負の相関がみられた。しかし、特に求めない群では有意な相関はみられなかった。コンピテンスの関係を見ると、特に求めない群では正の相関があったが、ときどき求める群、比較的多く求める群では有意な相関はなかった。

表10 対人交流における相手への意見の要求度別にみた自我同一性と個人の内的属性との関係

属 性	特に認めない		ときどき求める		比較的多く求める	
	PC	PC	SP	PC	SP	PC
対 人 不 安	0.277	0.168	-0.191	-0.237	-0.426***	-0.449***
自 己 没 入	0.891	0.509	-0.097	-0.097	-0.150	-0.109
共 感 的 配 慮	-0.829	-0.619	-0.169	-0.151	0.011	0.008
抑 う つ 性	-0.912	-0.487	-0.342**	-0.378**	-0.392**	-0.353**
コ ン ピ テ ン ス	0.955*	1.463*	0.029	0.035	-0.078	-0.068
セ ル フ モ ニ タ リ ン グ	0.923	0.976	-0.010	-0.008	-0.027	-0.019
社 会 的 ス キ ル	-0.906	-0.515	-0.074	-0.076	0.136	0.110
自 己 効 力 感	0.584	0.245	0.119	0.122	0.046	0.039

\*\*\*P<0.001,\*\*P<0.01,\*P<0.05

PC：偏相関係数 (Partial Correlation coefficient)

SP：標準偏回帰係数 (Standard Partical regression)

次に、自我同一性に最も影響している属性は、特に求めない群ではコンピテンスが、ときどき求める群では抑うつ性が、比較的多く求める群では対人不安であった。

## 考 察

### 1. 自我同一性と対人不安との関係

自我同一性と対人不安との間に有意な負の相関がみられた。これは、看護職者に対する調査報告<sup>45)</sup>と同じであった。安藤は、「人びとは、自分の同一性の問題を処理できるようになるとともに、他の人との関わりも自覚的に持てるようになる」<sup>46)</sup>と述べていることから、自我同一性が確立されることにより他者とうまく関わるができるが、逆に自我同一性が確立されていないと他者とうまく関わるができないために、対人不安が大きくなり、負の相関となったものと考える。

また、学年別にみると1年生群・2年生群・4年生群において有意な負の相関がみられた。これは、自我同一性が確立していないと、臨地実習などにおいて患者と関わる時に、自分は相手にどのように受け入れられているかという不安が大きくなる。その結果、負の相関となったものと考える。

性別にみると女性群において有意な負の相関がみられた。宮下らは、「女性は、親密な関係をもつことで同一性をより確かなものにし、同一性が確かなものになることで関係がより深まっていく」<sup>47)</sup>と述べている。また、Hodgson & Fisherは、「女性の場合は、同一性の達成と親密性の獲得とが並行して進む」<sup>48)</sup>と述べている。つまり、自我同一性が確立していると、相手との関係がより深まり、対人不安が小さくなるため、負の相関となったものと考える。

18～20歳群・21～25歳群において有意な負の相関がみられた。Eriksonは、「アイデンティティは、人生初期のすべての諸段階をとおして発達する」<sup>49)</sup>と述べている。また、Bunt, M. E.は、同一性拡散している者ほど、自己認識と他者による自己認識とのずれが大きくなると報告している<sup>49-51)</sup>。このことから、自我同一性が確立してい

ないと、自己認識と他者による自己認識のずれが大きくなり、対人不安も大きくなり、負の相関となったものと考える。

兄弟姉妹数の1人群・3人以上群において有意な負の相関がみられた。高田は、「青年期においては、自分自身と同輩との比較が自己概念形成におよぼす影響力が大きい」<sup>52)</sup>と述べている。つまり、年齢の近い他者の関わりが多いため、自己概念が形成され、自我同一性が確立し、対人不安が小さくなる。その結果、負の相関となったものと考える。

親友数の2人群、友人数の4人以上群において有意な負の相関がみられた。渡辺は、「アイデンティティが未確立であると、青年は他者と親しい関係をもつような状況で緊張を経験する」<sup>53)</sup>と述べている。つまり、自我同一性が確立していないと友人との関わりの中で緊張を経験し、相手に対して不安が大きくなるため、負の相関となったものと考える。

対人交流における相手に意見を求める程度では比較的多く求める群において有意な負の相関がみられた。自我同一性が確立していると、自分と他者の区別が明確になる。それに伴い、相手に意見を求めることにより相手がどのようなことを考えているのかということを知ることができ、対人不安が小さくなる。その結果、負の相関となったものと考える。

### 2. 自我同一性と自己没入との関係

自我同一性と自己没入の間に有意な相関はなかった。また、人口学的背景においても、有意な相関はなかった。これは、看護職者に対する調査報告<sup>45)</sup>と同じ結果であった。Bussは、「注意を向けられる自己を私的自己と公的自己に分けており、人は自発的に私的自己に注意を向けることによって、自分は何なのかという自己のアイデンティティについて考える」<sup>54,55)</sup>と述べている。また、丹野・坂本は、「公的自己に注意を向けさせるものとして、まずほかの人に観察されることがあり、大勢の視線にさらされるような場面では公的自己が意識されやすい」<sup>54)</sup>と述べている。私的自己に注意が向くことにより自我同一性が確立していく。しかし、看護学生は臨地実習等において他者の視線



にさらされる機会が多い。そのため、より公的自己に注意が向き、自己没入が高くなる。その結果、自己没入との相関がみられなかったものとする。

### 3. 自我同一性と共感的配慮との関係

自我同一性と共感的配慮の間に有意な相関はみられなかった。これは、看護職者に対する調査報告<sup>45)</sup>と同じ結果であった。しかし、人口学的背景において、3年生群・4年生群で有意な負の相関がみられた。丹野は、「他者理解には、相手の立場に視点を移動する能力の発達が必要である」<sup>56)</sup>と述べ、「公的自己像に寄りかかって自己を顕示する青年は、たしかに他者というものを敏感に意識している。しかし、この場合、他者の気持ちを正確に客観的に理解しているわけではない」<sup>56)</sup>と述べている。このことから、負の相関になったものとする。

親友数の3人群で有意な負の相関がみられた。長谷川は、「共感とは他者との交流によって体験される感情だが、それは相手に対する単なる好き嫌いではなく、いわば共鳴的な感情である。したがって、誰でも自分流の感じやすさの傾向があり、相手の感情のすべてに共鳴できるとは限らず、相手の態度や信条を認めること自体に拒否感を覚えてしまうこともある」<sup>17)</sup>と述べている。無藤は、「ひとりの人間としての自分の基盤となる感覚があるときに、他者についても、それらをもった存在であるという感覚が大前提として生じる。そこにいたって自分と他人の関係が成立する」<sup>11)</sup>と述べており、自我同一性が確立することにより「自分の感じ方」と「他人の感じ方」とを区別することができ、共感的配慮が困難となり、相手に対して共感的配慮ができないために、共感的配慮との間で負の相関になったものとする。

### 4. 自我同一性と抑うつ性との関係

自我同一性と抑うつ性の間に有意な負の相関がみられた。これは、看護職者に対する調査報告<sup>45)</sup>と同じ結果であった。遠藤は、「青年期の不安や抑うつは、精神医学的に病んでいるものにも正常なものにも、ともに見られる。しかも、不安は、大抵の場合、適切な行動によって解決され、抑うつも、その事件の重大さによって持続期間に差はあるが、間もなく解決されるようになる。感情

の安定は自己確信の基礎となる」<sup>11)</sup>と述べている。つまり、自我同一性が確立されることで自己確信の基礎ができ、抑うつが小さくなるために、抑うつ性との負の相関となったものとする。

また、2年生群・3年生群において有意な負の相関がみられた。宮下らは、「新しい職業的状况に入っていく初期の段階においては、新たに求められている同一性と以前の同一性との間の不連続感、失われていく古い同一性への哀惜、将来への不安などが伴う。そのため、抑うつ感や不適應感に悩まされることがある」<sup>57)</sup>と述べている。つまり、2年生・3年生になると看護に関する専門的なことを学ぶようになり、さらに、臨地実習などを通して患者と接する機会が多くなる。そのため看護という職業環境の中に入っていくため、自我同一性が不安定なものとなり、抑うつ感に悩まされるようになり、その結果、負の相関になったものとする。

女性群において有意な負の相関がみられた。Josselson, R. L. は、女性の同一性形成過程において積極的関与の重要性を指摘している<sup>47,58)</sup>。抑うつな人は、社会と関わることを避けるため、積極的に社会と関わりなくなる。それが自我同一性の確立に影響し、負の相関となったものとする。

18~20歳群・21歳~25歳群において有意な負の相関がみられた。Abramsonらの「改訂学習性無力感論」では、自分ではコントロールできないという経験が、抑うつを生じさせるきっかけとなるとしている<sup>42,59)</sup>。社会経験を積み重ねていく中で、自分ではコントロールできないという経験をすることで、抑うつとなりやすい。自我同一性が確立すると、自分の能力の限界を知ることができ、コントロールできないという経験に陥ることが少なく、抑うつが生じにくくなる。その結果、負の相関になったものとする。

兄弟姉妹数の1人群・2人群において有意な負の相関があった。山本・名島らは、「個人の血縁史的アイデンティティの成立する場所は、家族内における自己と他人との間、つまり、自己と親との間、自己と兄弟との間、自己と夫、自己と妻との間、自己と子供との間であり、要約すれば家である」<sup>60)</sup>と述べている。つまり、年齢が近い他者

との関わりや、自己と兄弟との間において自我同一性を確立していく。自我同一性が確立することで、自分というものが確かなものとなり、抑うつ性が小さくなり、負の相関を示したものとする。親友数の4人以上群において有意な負の相関がみられた。抑うつが強い人は、社会との関わりを避けるようになる。青年期は、社会との関わりを通して自我同一性を確立していく時期であり、社会との関わりが少ないと抑うつになりやすく、自我同一性の確立に影響する。逆に、他者との関わりの中で、自我同一性を確立している人は、自分と他者を知ることができ、抑うつが小さくなる。このことが負の相関となったものとする。

友人数の4人以上群において有意な負の相関がみられた。渡辺は、「抑うつの方は活動性が低く、楽しいと感じる出来事も少ない。また、活動レベルが低いと抑うつ気分も大きい」<sup>61)</sup>と述べている。つまり、活動レベルが高く、多くの人と関わっていく中で、自我同一性を確立している者は、抑うつ性が小さくなるため、負の相関となったものとする。

対人交流において相手へ意見を求める程度ではときどき求める群・比較的多く求める群において有意な負の相関がみられた。相手に意見を求めるということは、Nezuらは、「抑うつの方は、非抑うつの人に比べ、対人関係を持つための働きかけが半数程度にすぎない（自分から話しかけることが少ない）」<sup>61,62)</sup>と報告している。抑うつの方が、対人関係を持つための働きかけを行わないことにより、社会との関わりが減り、そのことが自我同一性の確立に影響する。逆に、非抑うつの方は、抑うつの人に比べ、対人関係を持つための働きかけを積極的に行うため、自我同一性が確立する。この結果、負の相関となったものとする。

### 5. 自我同一性とコンピテンスとの関係

自我同一性とコンピテンスの間に有意な相関はみられなかった。しかし、人口学的背景において、対人交流において相手へ意見を求める程度の中で、特に求めない群において有意な正の相関がみられた。無藤は、「自分を感得しかつ他者の存在を感じるとる感覚を、相互に促進しあうような関係を、人生の過程でいかにもちえるかということが、

アイデンティティ形成のうえで重要な問題である」<sup>11)</sup>と述べている。つまり、他者との関わりの中で、コンピテンス、すなわち効果的に環境と相互作用する能力を獲得することができ、アイデンティティの形成につながるものとする。逆に、コンピテンスを獲得できず、他者と効果的に関わりすることができないことが自我同一性の確立に影響する。この結果、正の相関となったものとする。

### 6. 自我同一性とセルフモニタリングとの関係

自我同一性とセルフモニタリングの間に有意な相関はみられなかった。しかし、人口学的背景において、1年生群では有意な正の相関、4年生群では有意な負の相関がみられた。濱田は、「自己同一性確立のための一連の作業プロセスとして適性や能力の自己理解から自己の進路の決定にいたる進路選択が考えられるのである」<sup>63)</sup>と述べている。したがって、自己理解することにより、自我同一性が確立する。つまり、大学に入学する時点で進路選択が迫られている看護学生は、自我同一性の確立が迫られている。岩淵・田中・中里らは、「内的要因に基づいて行動する傾向の強い個人は、自己の社会的行動の状況的適切さについての関心がそれほど高くないため、自己の行動を状況に応じて統制する傾向は弱い、すなわち低いセルフモニタリングである」<sup>25)</sup>と述べている。4年生は、専門的知識を学習し、臨地実習において患者の状況や行動に基づいて深く考え、その状況に対応していなくてはならない。つまり4年生は、内的要因のみではなく外的要因も取り入れて行動し、自己の社会的行動の状況的適切さに対する関心が高くなる。そのため、自己の行動を状況に応じて統制しようとするが、実際に統制することは難しく、自我同一性が確立していてもセルフモニタリングがうまく行えない。その結果、4年生群では負の相関となったものとする。それに反して、1年生は、今までの日常的な経験に基づいて状況に対応していくため、自己の行動を状況に応じて統制しやすい。その結果、1年生群では正の相関となったものとする。

### 7. 自我同一性と社会的スキルとの関係

自我同一性と社会的スキルの間に有意な相関はみられなかった。また、人口学的背景においても、

有意な相関はみられなかった。岡本は、「言語的コミュニケーションをうまく運用していく過程は、当然、社会的スキルの重要な一側面を構成する」<sup>64)</sup>と述べている。Mary Ellen Doona は、「コミュニケーションの能力によって、人間は、自我を拡大し、他者と交わり、他者と共通の世界をもてる」<sup>20)</sup>と述べ、「コミュニケーションとは、自我の境界をこえて他者と相互作用をもちながら、孤独に打ちかって集団の一員になるプロセスである」<sup>20)</sup>と述べている。看護学生は、臨地実習などを通して他者とのコミュニケーションをとる機会が多い。しかし、本研究で使用した社会的スキル尺度は、関係維持、関係開始、自己主張の3つで成り立っており、この3つのスキルが発達してなくても、コミュニケーション等のスキルの発達が、自我同一性の確立に影響しているのかもしれない。そのために、本研究での社会的スキルとの相関がみられなかったのかも知れない。

#### 8. 自我同一性と自己効力感との関係

自我同一性と自己効力感の間に有意な相関はみられなかった。しかし、人口学的背景において、親友数の2人群で有意な負の相関がみられた。福井らは、「自らの能力を過小評価して低すぎる自己効力感をもつ人がいる一方で、逆に自らの能力を過大評価して高すぎる自己効力感をもつ人もいる」<sup>44)</sup>と述べている。自我同一性が確立していないと、自己の能力もつかむことができず、自らの能力を過大評価して高すぎる自己効力感となり、自己効力感との間で負の相関になったものと考えられる。

### 結 論

看護学生196名の自我同一性と個人の内的属性である対人不安、自己没入、共感的配慮、抑うつ性、コンピテンス、セルフモニタリング、社会的スキル、自己効力感等との関係を調べた。その結果、対人不安、抑うつ性は、それぞれ自我同一性と負の相関を示した。また、共感的配慮、コンピテンス、セルフモニタリング、自己効力感などは、人口学的背景の違いによって自我同一性との関係がみられた。しかし、自己没入と社会的スキルは

自我同一性との関係がみられなかった。

### 謝 辞

本研究の調査にご協力くださいました、富山医科薬科大学の看護学生に深く感謝いたします。

### 文 献

- 1) 遠藤辰雄編：アイデンティティの心理学。pp 12-14, ナカニシヤ出版, 京都, 1998.
- 2) Erikson, E. H. : Childhood and society. New York : W. W. Norton. 1950. (草野栄三良訳, 幼年期と社会. 日本教文社, 東京, 1955.)
- 3) Evans, R. I., Dialogue with E. H. Erikson. New York : Harper and Row. 1967. (岡堂哲雄・中園正身訳, エリクソンとの対話. 北望社, 東京, 1971.)
- 4) 鑑幹八郎, 山下格編：アイデンティティ。pp 1, 日本評論社, 東京, 1999.
- 5) Erikson, E. H. Identity and the life cycle. Psychological Issues, No. 1. New York : International Universities Press. 1959. (小此木啓吾訳編, 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—. pp 112, 誠信書房, 東京, 1973.)
- 6) Richard I. Evans : DIALOGUE WITH ERIK ERIKSON, 1967. (岡堂哲雄, 中園正身訳, エリクソンは語る アイデンティティの心理学。pp 44, 新曜社, 1996.)
- 7) 相川充, 津村俊充編：社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する。pp112, 誠信書房, 東京, 1996.
- 8) Schlenker, B. R. & Leary, M. R. : Social anxiety and self-presentation : a conceptualization and model. PSYCHOL BULL 92 : 641-669, 1982.
- 9) 若山隆良：自己理解の心理学—ナースとして燃えつきないために。pp 57, 日本看護協会出版会, 東京, 1997.
- 10) 中島義明, 安藤清志, 子安増生他編：心理学辞典。pp 4, 有斐閣, 東京, 1999.

- 11) 前掲書 4), pp 49-57.
- 12) 丹野義彦, 坂本真士: 自分の心から読む臨床心理学入門. pp 32-34, 東京大学出版会, 東京, 2001.
- 13) 前掲書 9), pp 28.
- 14) 前掲書 4), pp 117.
- 15) Davis, R, H: measuring individual difference in empathy, Evidence for a multidimensional approach, J PERS SOC PSYCHL 44: 113-126, 1983. (菊池章夫訳, 共感の社会心理学. pp 10, 川島書店, 東京, 1999.)
- 16) Wispe, L. : The distinction between sympathy and empathy : To call forth a concept, a word is needed. J PERS SOC PSYCHL: 318, 1986.
- 17) 長谷川浩, 石垣靖子, 川野雅資編: 共感的看護—いま, ここでの出会いと気づき. pp 30-32, 医学書院, 東京, 1993.
- 18) 外口玉子, 中山洋子, 小松博子他: 系統看護学講座 専門25 精神看護学 1. pp 172, 医学書院, 東京, 2001.
- 19) Pyszczynski, T., & Greenberg, J.: Self-regulatory perseveration and the depressive self-focusing style: A self-awareness theory of reactive depression. PSYCHOL BULL 102: 122-138, 1987.
- 20) Mary Ellen Doona, Ed. D., R. N.: Travelbee's Intervention in Psychiatric Nursing Edition2, 1969. (長谷川浩訳, 対人関係に学ぶ看護—トラベルビー看護論の展開—, pp 43-53, 医学書院, 東京, 1994.)
- 21) 栗本かおり: 青年コンピテンス評価尺度作成. 関西学院大学社会学部紀要 78: 145-153, 1997.
- 22) Takai, J. & Oka, H. : Assessing Japanese interpersonal communication competence. JPN J EXP SOC PSYCHOL 33: 224-236, 1994.
- 23) White, R. : Motivation Reconsidered : The concept of competence. PSYCHOL REV 66: 297-333, 1959.
- 24) 前掲書 4), pp 158.
- 25) 岩淵千明, 田中国夫, 中里浩明: セルフ・モ  
ニタリング尺度に関する研究. 心理学研究: 54-57, 1982.
- 26) Snyder, M. : Self-monitoring of expressive behavior. J PER SOC PSYCHL 30: 526-537, 1979.
- 27) Snyder, M. : Self-monitoring processes. In L. Berkowitz (Ed.), Advances in experimental social psychology. Vol. 12. New York: Academic Press. pp 101, 1979.
- 28) 前掲書 20), pp 19.
- 29) 千葉京子, 相川充: 看護における社会的スキル尺度の構成. 看護研究 33(2), 53-62, 2000.
- 30) 前掲書 7), pp 4-21.
- 31) 前掲書 10), pp 330.
- 32) 堀洋道監修, 吉田富二雄編: 心理測定尺度集 II—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉—. pp 359, サイエンス社, 東京, 2001.
- 33) 板野雄二, 東條光彦: 一般性セルフ・エフェカシー尺度作成の試み. 行動療法研究 12(1): 73-82, 1986.
- 34) Bandura, A. : 自己効力 (セルフエフェカシー) の探求. (祐宗省三編, 重久剛訳, 社会的学習理論の新展開, pp 103-141, 金子書房, 東京, 1985.)
- 35) Bandura, A. : Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review: 84, 1977.
- 36) 谷冬彦: 自我同一性 (第V段階) 尺度の作成 (1) —下位概念設定および項目選定に関する予備的研究. 日本心理学会第61回大会発表論文集: 287, 1997.
- 37) 谷冬彦: 自我同一性 (第V段階) 尺度の作成 (2) —因子分析および信頼性の検討. 日本教育心理学会第39回総会発表論文集: 207, 1997.
- 38) 谷冬彦: 自我同一性 (第V段階) 尺度の作成 (3) —妥当性の検討. 日本心理学会第62回大会発表論文集: 263, 1998.
- 39) 谷冬彦: 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成. 教育心理学会研究 49: 265-273, 2001.
- 40) 林洋一, 小川捷之: 対人不安意識尺度構成の

- 試み—その2—. 横浜国立大学保健管理センター年報 No. 2: 23-41, 1982.
- 41) 前掲書15), pp 67.
- 42) 前掲書12), pp 8-18.
- 43) 菊池章夫, 堀毛一也編: 社会的スキルの心理学. pp 186, 川島書店, 東京, 1998.
- 44) 福井里江, 熊谷直樹, 宮内勝他: 精神分裂病患者の自己効力感—対人行動に関する自己効力感尺度作成の試み—. 精神科治療学 10(5): 535-536, 1995.
- 45) 横田恵子, 高間静子: 看護職者の自我同一性と個人の内的属性との関係. 富山医科薬科大学看護学会誌, 投稿中.
- 46) 前掲書1), pp 299.
- 47) 鑪幹八郎, 山下力, 宮下一博編: アイデンティティ研究の展望 I. pp 207, ナカニシヤ出版, 京都, 1996.
- 48) 前掲書47), pp 152.
- 49) 前掲書47), pp 111.
- 50) Bunt, M. E. : Ego identity : Its relationship to the discrepancy between how an adolescent views himself and how he perceives that others view him. *Psychology* 5 : 14-25, 1968.
- 51) Bunt, M. E. : A study of certain aspects of ego identity as demonstrated by the discrepancy between how adolescent views himself and how he perceives that others view him. *Dissertation Abstracts International* 28 (11-A) : 4474-4475, 1968.
- 52) 高田利武, 丹野義彦, 渡辺孝憲: 自己形成の心理学. pp 32, 川島書店, 東京, 1996.
- 53) 前掲書 52), pp 175.
- 54) 前掲書 12), pp 171.
- 55) Buss, A. H. : Self-consciousness and social anxiety. San Fransisco : Freeman. 1980.
- 56) 前掲書 52), pp76.
- 57) 前掲書 47), pp163.
- 58) Josselson, R. L. : Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth & Adolescence* 2 : 3-52, 1973.
- 59) Abramson, L. Y., Alloy, L. B., & Metalsky, G. I. : The cognitive diathesisstress theories of depression. In L. B. Alloy (Ed.), *Cognitive processes in depression*. New York : Guilford Press. pp 3-30, 1988.
- 60) 前掲書 47), pp 270.
- 61) 前掲書 7), pp 161-162.
- 62) A. M. Nezu, C. M. Nezu & M. G. Perri : Problem-solving therapy for depression. John Wiley & Sons, 1989. (高山巖監訳, うつ病の問題解決療法. 岩崎学術出版社, 東京, 1993.)
- 63) 前掲書 1), pp 174.
- 64) 前掲書 7), pp 50.

## Relationships between nursing students' ego identity and their internal attributions

Makiko ASAI<sup>1)</sup>, Keiko YOKODA<sup>2)</sup>, Shizuko TAKAMA<sup>2)</sup>

- 1) Student, School of Nursing, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University
- 2) School of Nursing, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University

### Abstract

The relationships between ego identity and internal attribution of nursing students was examined. The internal attribution consisted of self-awareness in interpersonal relationships, self preoccupation, empathy consideration, depressives, competence, self monitoring, social skills and self-efficacy. A sample was 196 nursing students in the university. As the result, the scores of depression showed negatively correlation with those of ego identity. The scores of negative self-awareness in interpersonal relationships showed partial correlation coefficient with significant level of 0.1% to those of ego identity. In addition, empathy consideration, competence, self monitoring and self-efficacy depended on attribution in nursing students. But, the scores of self-efficacy and social skills didn't show correlation with those of ego identity.

### Key words

nursing student, ego identity, self-awareness in interpersonal relationships, depressive